

## 学習習慣を確立する自律学習の奨励：オンライン授業での取り組み Establishing Study Habits: Encouraging Autonomous Learning During Remote Learning

加山裕子, マニトバ大学  
Yuhko Kayama, University of Manitoba

### 1. はじめに

新型コロナウイルスの感染拡大のため、2020年3月に突如として始まったオンラインでの授業だが、感染状況の悪化で対面授業にすぐには戻れず、2年以上にわたってオンライン授業を続けざるを得なかった教育機関も少なくない。コロナ禍2年目のオンライン授業では、学習者の「コロナ疲れ」のせい、テクノロジーを介しての授業形態に飽きを感じ始めたのか、学習意欲の低下や学習習慣の欠如・未発達が見られるような印象を強く受けた。対面授業に比べ、注意力や集中力に欠ける学習者が目につき、日本語の習得に伸び悩む者が多く見受けられたからである。オンライン授業であるからこそ学習者は主体的に学習することが求められるのだが、そうした習慣が確立できないでいる者が多いなかで、自律学習を奨励しなくてはならないという危機感が生まれた。本研究では、オンライン授業の期間に、日本語学習者の授業時間外での学習を習慣化するために行った取り組みについて報告する。

### 2. 先行研究

#### 2.1 オンライン授業の問題点

コロナ禍に入ってから、オンライン授業の効果や問題点についての研究が次々と出されている。例えば、河内他（2021）は学習者と教員の両方を対象にオンライン授業への評価を求めた。学習者たちはZoomやGoogle Classroomを使った授業に対して肯定的な評価をしながらも、「パソコンやインターネットに問題が起こる」（56%）「ほかの学生と話しにくい」（54%）「目や体が疲れる」（52%）「授業に集中しにくい」（42%）などというデメリットを指摘している。また、「先生と話しにくい」（35%）ことも挙げられた。岡田（2021）は学生が捉えたオンライン授業のメリット・デメリットを調査分析した。学習者は移動しなくても授業を受けられる便利さをオンライン授業のメリットとしているが、同時に「授業に集中しにくい」「オンライン環境への不安」「人との交流が少ない」「授業への意欲が低下する」「課題が多い」などをデメリットとして挙げている。

上記の二つの研究にある「ほかの学習者との交流がしにくい」ことをオンライン授業で改善するのは、ブレイクアウトルームなどの機能を用いたとしても、対面授業に比べると困難であると言える。オンラインの授業ではクラスメートの顔は見えるが、授業の前後に近隣の席の者でちょっとした会話をしたり、わからないことを確認し合ったりして学習者同士の仲を深める機会がほとんどないからだ。クラスメートと友だちになってスタディーグループを作りお互いに学び合うことも難しい。つまりオンライン授業では、学習者は孤立しやすく、学習者間の情報交換やコミュニティー作りがしにくくなってしまっている。

田中・椿本（2021）は、オンライン授業受講形態と学習意欲の関連性を学習者にアンケートをとって調査した。彼らの調査結果では、授業への取り組み方や時間管理に関する質問に低い数値が報告され、コロナ禍以前のデータと比較して自律度が低いことが明らかになった。田中・椿本は、オンライン授業によって学習者の自律が阻害されている可能性を示唆している。

オンライン授業ではほとんどの学習者は自宅内で受講するため、授業中にクラスメートとコミュニケーションをとることができなかつたり他の学習者からの様々な刺激や動機付けを得られなかつたりすることで学習習慣や学習意欲にネガティブな影響が及んでいるのではないかと考えられる。

## 2.2 自律学習の習慣化に向けて

自律学習あるいは学習者オートノミー（青木 2010、他）とは、学習者が主体となって立てた計画に基づいて自らの学習を管理することである。青木（2010）によれば、自律学習では学習者が学習の目標を設定・計画し、実行し、評価をするというサイクルを繰り返すとされている。自律的に学習する能力を育成するには様々なリソースを有効に活用することが必要であり（梅田 2005）、効果的な学習法／学習ストラテジーが、自律的な学習につながっていくとされる。一方斎藤・田中（1999）によると、学習ストラテジー論は優秀な学習者の研究から始まったもので、これを学習経験が未熟であったり学習適性が低い学習者に適用するには限界があると述べている。学習適性が低い学習者を相手に学習ストラテジーを言語学習の目標の一部とすることで、彼らの学習の進行を妨げるリスクがあると指摘している。

この取り組みの対象とした日本語のクラスでは、すべての学習者が優秀で学習経験に富んでいるわけではなかった。実際に日本語クラスの学習者全員が自律学習の習慣を身につけることが可能であるのか、そこには大きな疑問と不安があった。しかし日本語を履修する学習者たちは、それぞれ何らかの動機があって日本語を学びたいと考えているのであるから、その大きな目標に向かって日々の一步一步の努力を続けるよう後押ししていくことにした。

本稿の取り組みでは、自律学習の基本的な骨組みである〈目標設定、実行、自己評価〉をごく簡単な形で学習者に実践させ、それが日本語学習の習慣化と学習意欲の向上につながることを期待した。

## 3. 実践概要

### 3.1 対象クラス

対象となったのは、カナダの大学で 2021 年 9 月より 2022 年 4 月まで日本語のコースを履修した学習者である。「初級日本語」コース（初級下、「げんき I」レベル）と「中級日本語」コース（初級中、「げんき I～II」レベル）の 2 コースで、どちらも初めから終わりまでオンライン（Zoom による同期型）で授業が行われた。「中級」のコースの学習者は、その前の年もオンラインで日本語の授業を受けていた者たちで、「初級」の学習者の大半は初めて日本語に触れる者たちであった。授業時間は 50 分の授業を週 3 回のペースで行い、秋・冬学期で 26 週

間のコースであった。最後まで履修した学習者の数は「初級」で 18 名、「中級」で 16 名であった。

### 3.2 取り組みの手順

まず秋学期の初めに、学習者全員に LMS (Learning Management System) 上でアンケートを行い、日本語が上達したら何をしたいのかを訊ねた。その後取り組みを始める前に、学習者たちに日本語コースを履修する目的を省みさせ、自ら目標を立てて日々学習を積み重ねることの大切さと自律学習における学習者の役割について簡単に説明した。同時に、LMS 上に日本語の学習を手助けする様々なオンラインリソースのリンクが載せられていることも紹介し、利用を促した。

学習者は毎週月曜日に LMS 上にその週の学習目的を自主的に設定し、次の月曜日には新しい学習目標と前の週の目標の達成度の自己評価 (5段階; 5=100%達成、4=80%達成、3=50%達成、2=30%以下達成、1=達成しなかった) を記録した。学習の目標は各自自由だが、無理な目標は避けて実行可能な小さい目標を週ごとに立てていくようアドバイスした。教員は「ファシリテーター・情報提供者」

(梅田 2005) として、毎週の記録に励ましや建設的なコメントを送り、目標が曖昧であったり目標達成できないでいる学習者には質問や助言をするなどして自律学習を奨励した。とかく学習者が孤立しがちなオンライン授業では、教員と学習者の一対一のやり取りが好まれる (邵 2021) とされるが、LMS 上の毎週の記録とコメントでその機会を増やしつつ、自律学習の習慣化を図った。

一つ明記しておきたいのは、この取り組みによる成績への加算はなく、参加は任意であったことである。学習者は目標達成できなくても成績を気にすることなく記録をつづった。最後に、学期の終わりに LMS 上でアンケート調査を行い、学習者にこの取り組みに対する意見と感想を求めた。

## 4. 結果と考察

### 4.1 参加者数の推移

表 1 は、日本語のコースを最後まで履修した者の中でこの取り組みに参加した学習者の数を、秋学期の取り組みを始めた週と冬学期の終わりの週に数えたものである。

表 1 取り組みへの参加者数

	初級日本語	中級日本語
第 1 週 (9 月)	16	15
最終週 (4 月)	4	4

上にも述べたように、この取り組みへの参加は任意であり成績にも影響しないため、実際に取り組んだ参加者の数は各クラスの学習者数よりも少なく、秋学期の初めに比べると、冬学期の終わりまでに参加者数が大幅に減少している。取り組みを続けられなかった理由については、後のセクションで報告する。

### 4.2 週ごとの投稿内容と自己評価

毎週月曜日の LMS へのポストにおいて一般的に見られた目標は以下の通りである。

表 2 週ごとの目標

漢字を練習する	アプリを使って話す練習
新しい単語を覚える	ラボの録音をする
文法を覚える	語彙・文法の復習
テスト・クイズの勉強をする	オーラルテストの準備
前の課の復習をする	ワークブックの宿題をする

一番多かったのは、語彙の暗記や課の復習など学習者が授業外でなすべきことであった。上記以外にも「『げんき』のサイトで活用を練習する」「テストで頑張る」のほか、「て形を覚える」「質問のフラッシュカードを作る」「アプリを使って簡単な日本語を読む」など、より具体的な目標もあった。「初級」の学習者の中には、途中からポストを英語ではなく日本語で書きはじめた学習者がいた。日記のように自分のすること・したこと記録をし、それがさらに日本語の練習につながったようであった。

自己評価に関しては5段階評価で4や5が多い中、3も時々見られた。目標だけをポストして自己評価をしていない学習者もいたので、授業内で念を押して振り返りの大切さを伝えた。ポストの中で学習法やリソースなどについて質問をしてくる者がいたので、各々に情報を与えた。

### 4.3 アンケート調査の結果

#### 4.3.1 参加状況

表 2 はアンケートに回答した学習者の数とその中で取り組みに参加したと申告した学習者の数を表す。

表 2 アンケートへの回答

	初級日本語	中級日本語
回答数	11	4
取り組みへの参加者数	9*	3

\*この数字は「取り組みに参加したか」という質問に対して「yes/no」の両方を選んだ学習者も含まれている。一旦は参加したが、その後参加しなくなった者たちであると考えられる。

アンケートによる自己申告では、取り組みに参加した「初級」9名のうち、90～100%の割合でポストしたという学習者は4名、60～80%が2名、他の3名は50%以下であった。「中級」では90～100%ポストしたという学習者が2名、60～80%が1名であった。

#### 4.3.2 不参加の理由

回答数は少なかったが、取り組みに参加しなかった（一部不参加の者も含める）と申告する学習者からその理由を得ることができた。「初級」コースから

は、「自分なりの学習法があるからポストは必要ない」「ポストするのを忘れてしまう」などという理由が挙げられた。「中級」では「週ごとの目標は細かすぎる。月ごとでいい」という意見があった。

#### 4.3.3 学習習慣への効果

アンケート調査で「取り組みに参加した」と申告する学習者に「この取り組みによって学習習慣を築くことができたか」という質問に対する回答を図1に表す。

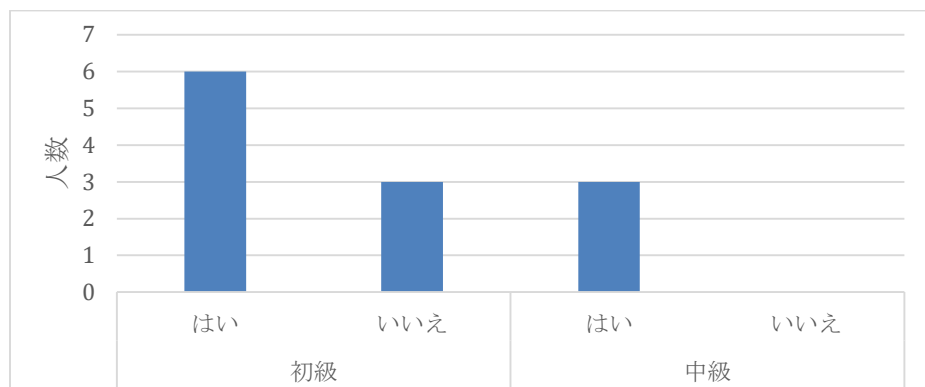


図1 学習習慣への効果があったか

「初級」の学習者の9名中6名が「はい」と答えたのに対し、「中級」の学習者は全員が「はい」と答えた。コメントとしては、「学習習慣の基礎作りになった」「毎週何をしなければならぬか分かりやすかった」「毎週自分が少しずつ上達しているのがわかった」などが挙げられた。「いいえ」と答えた学習者は、「LMS外で目標設定や自己評価をしている」「ポストを忘れてしまうことが多かった」などと書いていた。

#### 4.3.4 学習意欲への効果

この取り組みが学習意欲への向上につながったか否かの質問に関して、図2のような回答が得られた。

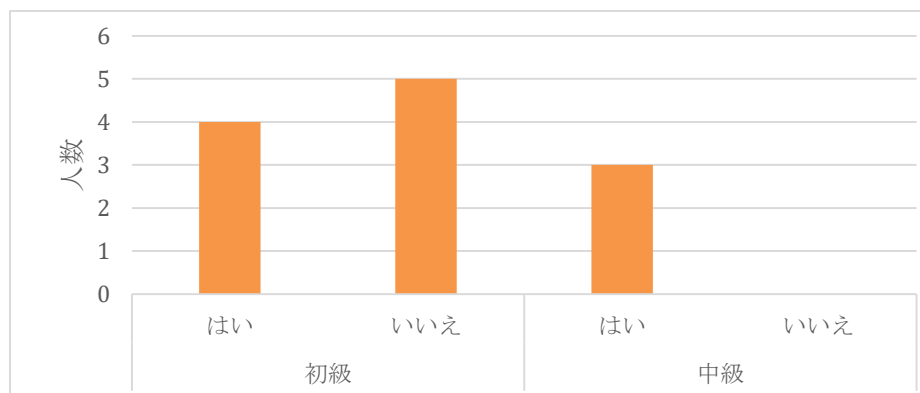


図2 学習意欲への効果があったか

学習習慣への効果とは対照的に、学習意欲への効果に関しては、「初級」の9名中4名のみが「意欲が向上した」と回答した。「中級」の学習者は3人とも「はい」と答えた。「5段階評価の5を取ろうとして頑張った」「前の週に目標達成できなかったらもっと勉強しようと思った」「目標達成しようと思ふになった」「各課で覚えなければいけないことを再確認できる」などがあつた。「いいえ」と回答した学習者のコメントには、「この取り組みで特に意欲が向上したとは思えない」「もともとよく勉強するほうなので、あまり変わらなかつた」「よくポストするのを忘れてしまったので学習意欲には効果がなかつた」などがあつた。

最後に、「この学習法を今後も続けていくか」という質問に対する回答を図3に表す。

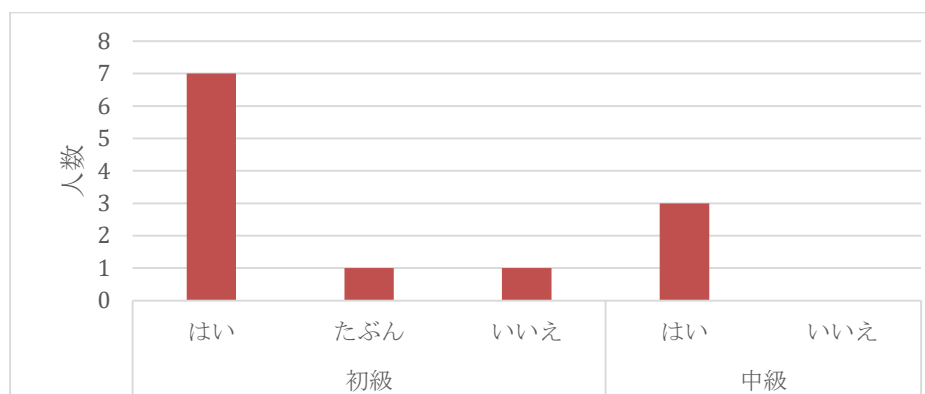


図3 今後もこの学習法を続けるか

上記の学習意欲への効果については「初級」で意欲が向上したと回答していた者は半分以下であつたが、今後もこの<目標設定・実行・評価>という学習法を続けるかという質問に対しては、「初級」では9名中7名、「中級」では全員が将来的にも続けていきたいと回答した。コメントでは、「他の教科にもこの学習法を使いたい」「自己反省や精神衛生にもいい方法だ」「自分のペースで勉強できて、理解したことに自信が持てる」「日本語のスキルの上達に役に立つ」などの肯定的な意見が挙げられていた。「いいえ」と答えた学習者は「自己管理できるので必要ない」と記していた。

## 5. まとめと今後の課題

言語を学ぶ学習者にとって、主体的な日々の積み重ねの学習が不可欠であることは言うまでもないが、そうした自律学習には、学習目標を立てそれを予め決めた時間内に達成しようとする決意と計画を遂行する力が求められる。高等教育機関に進学してくる学習者たち全員が、そうした学習習慣を入学前に身につけているわけではないのは言うまでもない。言語習得に関しては、授業以外の時間で自ら学習内容に取り組む必要が他の教科よりも大きく、ある期間内に学習内容の学びが行われなければ、学習者は授業にもついていけなくなっていく。オンライン

の授業ではクラスメートが頑張っている様子や試験前の切迫感なども感じにくいようで、学習者によっては何の目標も熱意もなくただ漫然と授業に顔を出すだけになってしまっている者も見受けられた。

このように学習習慣の乏しい者に授業時間以外にも学習に臨む姿勢を身につけてほしくて始めた取り組みだが、最初は取り組みに参加していた学習者もその後数が減っていき、何もポストしなくなった者も多かった。参加が任意であったため、他の授業や宿題・課題などに優先順位がとられてしまったものと思われる。アンケートによると「(学習目標を) ポストするのを忘れてしまう」「LMS 以外のところで自分なりに目標を立てていた」と言っている者もいた。今回の実践で特に学習習慣を確立してほしかった学習者たちは、遺憾ながら取り組みにはほとんど参加せず、最終的に学習習慣やコースで網羅した内容を身につけてはいなかった。成績に関係のない任意での参加では、学習適性や学習意欲が低い学習者に実施してもらうことに難しさがあったと言える。学習意欲・学習適性の低い学習者に如何に自律学習を促すかは今後の課題である。

アンケートの結果を見ると、二つのコースで多少の違いが見られた。「中級」コースで取り組みに参加した学習者たちは(人数が少ないものの)全員が、目標を立てて実行することで学習習慣がついたと申告し、今回の取り組みを高く評価していたのに対して、「初級」の学習者たちの中には、既に学習習慣を確立していてこの取り組みを特に必要と感じなかったと言う者がいた。「初級」の学習者は、高校を卒業したばかりでオンライン授業の期間が短く、それ以前の自身の学習形態を継続していった者が多かったのではないかと推測される。その一方で「中級」コースの学習者たちは、オンラインで日本語を学んで2年目とオンライン授業の期間が長く、学習意欲や学習習慣が崩れ始めていた可能性も高い。彼らは今回の取り組みによって効果的に学習習慣を築き、それを今後の学習形態にも取り入れたいと考えたようである。

興味深いのは、この学習習慣を確立するための取り組みが学習意欲を上げるのに効果的ではなかったと申告する者も含めて、参加したほとんどの学習者からこの学習法を他の教科にも活用するなどして今後も続けていきたいという回答が得られたことだ。取り組みに参加した学習者には、自律学習の第一歩を踏み出してもらえたと言えるだろう。

最後に、学習者のコメントに「(LMS を通して) クラスの皆の目標が読めるので、自分一人の努力と言うよりグループとしての努力のように思えた」というのがあった。ポストは LMS 上のディスカッション機能を使用したため、クラスの誰でも他の学習者のポストを見ることができるようにはなっていたが、彼らに他のポストを読む時間的余裕があるとは当初考えていなかった。しかし一部の学習者は他のポストを見る機会があり、他の学習者からの刺激に乏しいオンラインの授業にも関わらずそうやってクラスメートの自宅学習の様子がうかがえたことは、よい刺激や影響になったのではないだろうか。今回のオンラインの取り組みでは限界があったが、今後対面授業が再開されるにあたって、教室内で学習者同士のやり取りが行われれば、何をどのように勉強しているかや効果的な学習方法

などの情報交換も可能になり、自律学習への意欲や継続する力にもつながっていくと期待したい。

### 参考文献

- 青木直子 (2010) 学習者オートノミー、自己主導型学習、日本語ポートフォリオ、アドバイジング、セルフ・アクセス 『日本語教育通信 日本語・日本語教育を研究する』 第38回 国際交流基金  
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/teach/tsushin/research/201003.html> (参照日 2022, 06, 27)
- 河内彩香・村田晶子・長谷川由香・竹山直子・池田幸弘 (2021) 教員と学習者はオンライン授業をどうとらえたか -Zoom と Google Classroom を併用した日本語教育- 『多文化社会と言語教育』 Vol.1, 30-45
- 岡田佳子 (2021) 学生から見たオンライン授業のメリットとデメリット -オンライン環境下のアクティブラーニングに焦点を当てて- 『長崎大学 教育開発通信機構紀要』 第11号 25-41
- 斎藤里美・田中望 (1999) 「学習ストラテジー」は学習者を幸福にするか 宮崎里司・J.V. ネウストプニー共編 『日本語教育と日本語学習 学習ストラテジー論にむけて』 くろしお出版 pp. 173-181
- 邵丹 (2021) オンライン授業における自律型学習 (アクティブ・ラーニング) 『名古屋外国語大学論集 第8号 特集:コロナ禍におけるオンライン教育-課題と今後への展望-』 163-177
- 田中仁一朗・椿本弥生 (2021) 学習意欲とオンライン授業形態の関連性 『日本教育工学会研究報告集』 132-139
- 梅田康子 (2005) 学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割 -学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る- 『言語と文化: 愛知大学語学教育研究室紀要』 39 (12), 59-77